

已然形に係助詞「や」の附く形式

此 島 正 年

一、その二用法

上古の文章では、「活用語の已然形プラス疑問の係助詞や」の形式がかなり用いられる。そして、それには二用法があつて、一は反語として終止し、他は条件法として下へ続く。たとえば

○…と慰むる心しなくは天ざかるひな一日もあるべくも安礼也(万十八)——反語終止

○しましくもひとりありうるものに安礼也島のむろの木離れてあるらむ(十五)——条件法

ところが、後者をも反語終止と見る説がある。たとえば佐伯博士は右の歌の「あれや」をそこで切り、下句は

「何しかも」を補つて「(それなのに) どうして島のむろの木は離れているのであらう」と解している(「万葉集の

助詞二種」^{〔万葉語研究〕}所収)。なお、博士はこの類例として

あぶりはす人も在八方家人の春雨すらを間使にする(万九)1698

あは島のあはじと思ふ妹に安礼也やすいもねずてあが恋ひわたる(十五)3633

足柄の箱根のねろのにこ草の花つ妻奈礼也紐とかずねむ(十四)3370

等を挙げ、これらは「あればや」「なればや」の意としては全然意味をなさないとする。

もつとも、博士は後者のすべてを反語終止とするわけではなく、たとえば

古の人にわれ有哉ありさきなみの古き都を見れば悲しき（万一 32）

などは、新考で反語終止としているのに反対して、条件法としている。そうして、このように後者に断続の二種を區別するのは、全くそれぞれの意味によるのであって、形態的には両者共に下に連体形の結びを持つ句がある点、何の差もないのである。

私はやはり、連体形の結びを持つ句が下にあるばあいには、原則としてそれを帰結句とし、「已然形プラスや」はそれに係る条件句とする立場をとりたい。右の 32 をそう見うるなら 3601・3633 等の歌も全く同様に解しうると思う。1698 の歌には問題があるが、後に述べる。

○ほんのしばらくも一人でありうるものだからとて、島のむろの木は離れているのだろうか（自分にはとても一人でいることはできないのに）。

○（あは島の）もう二度と逢うまいと思う妹だからとて、自分はこんなに安眠もしないで悲いつづけるのか（実際はそのうちまた逢えるのに）。

佐伯博士が 32 を別扱いにしたのは、これを反語ではなく単純な疑問としたためらしいが、しかしこれも

○古の人で自分はあるためにさきなみの古い都を見れば悲しいのかしら（事実は古い人ではないのだが）。

のように、やはり反語的含蓄はあるのであって、3601 等と本質的に変りはない。「已然形プラスや」は、文中にあっても文全体を反語的にすることが多いのである。（沢瀉博士「『か』より『や』への推移」「万葉の作品」と時代」所収）

ただ問題は、3370 のように帰結句が「……む」の形をとり仮想表現をするばあいで、これでは已然形の条件に対して結びが仮想となるため、呼応に難点がある。この点を佐伯博士は最近特にとりあげ、少くともこのばあいは「や」で

句切とすべきことを強調している。これについては後で触れることとする。

二、万葉集における用法

上代文献において「已然形プラスや」の形式が最も多くあらわれる万葉集について、その用法を検する（総索引を用いた）。

前述の立場で文末用法（反語終止）と文中用法（条件法）とを分けると、前者のほうが多い——特に「や」が「やも」であるばあいに。^{（注）}

文中	文末	用法／形式	
		—や	—やも
29	68	—や	—やも
5	115	—やは	合計
1	0		
35	183		

ただし、文末用法は多いと言っても、「めや」「めやも」が大半を占めている。

文末「や」				68			
めや	思へや	らめや	あれや	46	12	5	2
逢へや	忘るれや	ざれや		1	1		

文中 「や」 1	文中 「やも」 5		文中 「や」 29							
	なれやも	あれやも	行けや	合へや	すれや	頼めや	恋ふれや	思へや	なれや	あれや
あれやは 1	なれやも 1	あれやも 2	行けや 1	合へや 1	すれや 1	頼めや 1	恋ふれや 3	思へや 3	なれや 5	あれや 7
	許せやも 1	思へやも 1		なかれや 1	ぬれや 1	れや 1	たれや 1	立てや 1	飲めや 1	問へや 1

特に「やも」では「めやも」がほとんど全部と言つてよいほどである。これに対して、文中用法は、数こそ少いが、わりあいバライエティがある。

文中 「やも」 115			
じやも 1	けめやも 1	らめやも 1	めやも 109
	れやも 1	こひしけ なれやも 1	あれやも 1

すなわち、文中には「めや」「らめや」等は全くなく、「あれや(も)」「なれや(も)」が多少多い程度で、種々の語(特に動詞)にゆきわたっている。

(注) 連体形で結ばれた句を下に持つか否かで文中・文末の区別をしたので、次の二歌では問題がある。

あぶりほす人も在八方ぬれ衣を家にはやらな旅のしるしに (九¹⁶⁸⁸)

あぶりほす人も在八方家人の春雨すらを間使にする (同¹⁶⁹⁸)

前者は文末、後者は文中といちおう分けたが、後者は下に連体形止めがあつても例外的に文末反語用法とすべきであらう。それは、前者の上句と同一だからというだけではなく、「あぶりほす人も」と主語が「も」によつて提示されて「あれや」に係るおもむきから、そう解されるのである。「も」はその受ける語を一例として同種の事物を言外に含める意で、打消の叙述がこれに應ずることが多い。このばあいも「旅のこととてあぶりほす人も何もあろうか、ない」というふうには、反語「あれや」の持つ打消の意と呼応しているのである。ちなみに「もしきの大宮人はいとまあれや梅をかざしてここにつどへる」(十¹⁸³³)のように「は」が已然形と應ずるときは、条件句となつて下へ続くものが多いようである。

さて、万葉における右の状態を見ると、当時の文法としては、むしろ文中用法のほうが、数は少くとも種々の語に広く附いている点で、活力のあるものだったのではなからうか。文末用法で「や」の受ける語の種類が少くかたよりがあるのは、古くはもっと語の種類が多かったのがしだいに衰えて来た結果か、あるいはもともと限られた語だけだったのか。

ちなみに、記紀歌謡や宣命にも「已然形プラスや」の例が多少見えるが、
○たまきはる内の朝臣が腹内にいさご阿例椰いざあはなわれは (紀九²⁸)

とこしへに君も阿閉椰毛いさなとり海の浜藻の寄る時々を (同十三⁶⁸)

親なしに汝那理難迷夜（同二十二104）

○皇朕が政の致せるものに在米耶（第六詔） なほあるべきものに有札夜止……（第六詔）

女は言はれぬものに阿札夜（第十三詔） しか得言也（第二十七詔）

等、すべて文末例だが、やはり「あれや・めや・けめや」にかたよっている。

已然形は周知のように本来それ自身で順逆の接続に用いられた。

さよばひにあり立たし、よばひに阿理迦用婆勢、大刀が緒も未だ解かずて、襲をも未だ登加泥、をとめのなすや板戸をおそぶらひ、わが立たせれば（記上2）

引き放つ矢の繁けく、大雨の乱れて来札、まつろはず立ち向ひしも、露霜の消なば消ぬべく、ゆく鳥の争ふはしに（万二199）

わが背子がかく恋札許。曾ぬばたまの夢に見えつついねえすけれ（四639）

何須札曾母とふ花の咲き出来ずけむ（二十4323）

吾妹子がいかにかに於毛倍可。ぬばたまの一夜もおちず夢にし見ゆる（十五3647）

盧舍那仏の慈み賜ひ福はへ賜ふものにありと念閉、受賜り恐り戴き持ち（第十二詔）

已然形に「ぞ・か・こそ」等の係助詞のつくことが比較的多く、本論文でとりあげている「已然形プラスヤ」の文中用法も、この類である。

已然形のこのような用法は、すでに言われているように、接続助詞発達以前の古い表現法をたまたま残しているのであろうが、上古の文献ではもう接続表現の本道は接続助詞の添加によるようになっていた。たとえば、右に引いた

紀上2の歌で、「ありかよはせ」「とかね」がある一方に「立たせれば」があり、後者が当時の本筋の接続表現形式で、前者は、接続とはいえ順逆に兼用されているのでもわかるように（「ありかよはせ」は順接的、「とかね」は逆接的）、その接続の意はかなりあいまいで弱い。本来の已然形は、終止形に比して強く確定的に表現することにその本質があったのであって、その語勢のためにおのずから確定条件的に下へ続くことになったのではないか。従って一方に余韻を残して終止法に用いられることもあったと思われる（これについては京極興一氏「奈良時代における已然形の一用法」国語と国文学 昭和三五年一月が参考になる）。たとえば

……うつせみの世の人われも、ここをしもあやにくすしみ、往き変る年のはごとに天の原ふりさけ見つ言ひ継ぎに須礼（十八） 4125

のように、時代の下る家持の歌にもこんな用法が見える（サ変動詞「す」が已然形「すれ」によって確定的詠嘆的終止になっている）。「こそ」の結びとなるばあいにはこの用法が普通にあらわれて、後世まで行われたであろう。

今問題にしている「已然形プラスヤ」の反語終止法は、右のような已然形の強調終止性が、疑問「や」との結合によって「あれ・め」等の限られた語にあらわれたのではなからうか。已然形が強調的なるが故に、「や」と結合しても単純な疑問を通り越して反語となるのではなからうか。従って、時には反語でない用例も見えるのであろう。

何せむに吾を召良米夜……歌人と吾を召良米夜（万十六） 3886

さて次に文中用法における帰結句の結び（連体形）について調査してみよう。

①うつそを麻績の王あま有哉なれやいらごが島の玉藻薊麻須（一） 23

ほととぎす声聞く小野の秋風に萩開礼也なれや声の乏寸（八） 1468

②飛鳥川あすだに見むと念八方わが王の御名忘れ世奴（二） 198

白まゆみ斐太の細江の菅鳥の妹に恋哉いを寢宿金鶴(十二) 3092

のように、用言ないし打消・完了等の助動詞が大部分で、すなわち帰結句は既存事実の叙述が原則である(「下のよ
うな事実が存在するのは……だからか」という気持)。「らむ・けむ」等の現在ないし過去の推量辞が用いられても
同様で、

(3) 乳飲哉君が乳母求覽。(十二) 2925

伊豆の海に立つ白雲の絶えつつもつがむと思倍也美太礼曾米家武(十四) 3360 或本歌)

等、「君が乳母求む」「乱れそめた」ことは事実、その事実の理由を推量している(「や」と「らむ・けむ」が呼応
して)。そして、反語的になることが多いが、3092・3360のように反語にならないこともある。沢瀉博士はこれを「や」
が「か」の領域を侵した新しい用法とした。

以上の三種に対して、「む」で結ぶばあいは趣を異にする。

(4) 玉藻刈る辛荷の島に島回する鵜にしも有哉家不念有六(六) 943

石倉の小野ゆ秋津にたちわたる雲にしも在哉時をし將待(七) 1368

白まゆみ石辺の山ときはなる命哉恋ひつつ居(十一) 2444

足柄の箱根の嶺ろのにこ草の花つ妻奈礼也紐とかず彌牟(十四) 3370

の四例がそれである。これらの「家念はずあること」「時を待つこと」「恋ひつつ居ること」「紐とかず寝ること」
は、事実ではなくて、「む」の添加によって作者の心内の仮想として表現されている。ところが、それに対する条件
句が已然形で出来ているのはぐあいが悪く、本当は「鵜にしもあらば」「雲にしもあらば」「命ならば」「花つ妻な

らば」とありたいところである。そこで、前述の佐伯博士の説のように、これらの「あれや・なれや」を句切として反語終止とする考え方も出て来る。

たしかにこの類は文中用法とするのに困るものであるが、しかし、これを救う一つの行き方として、これらの「…む」を純粹の仮想と見なくてもよいのではないということが考えられる。「家念はずあること」等は、まだ事実ではないけれども、いやでも事実となるべきことがらではないのか。いわば「あるべき事実」「準事実」と見られはしないだろうか。

○……鶺鴒でもあるからとて、家を思わずにいななければならないのだろうか（そんなことは出来そうもないのに事実はそのようになるはず）。

○……雲でもあるからとて、時を待たなければならぬのだろうか（〃〃）。
のように解すれば「已然形＋や…む」の呼応もありえないことではないと思う（「鶺鴒にしもあらば」という純仮想よりも、作者の嘆きはるかに切実であろう）。

なおまた、右の四例共「あれや・なれや」であることも注目される。^(注)特に「あれや・なれや」のばあい、「や…む」の呼応がゆるんで、「鶺鴒にしもあれや」に含まれる「そうではない」という反語の氣持が強く出て、その結果「鶺鴒でもないのに家を思わずにいられようか」という逆接の意味が生じたと見ることもできようか。

しかし、いずれにせよ、この類を「や」で句切にしてはつきりと上下に切離す説には賛成できない。

(注) もっとも

天の河夜舟を漕ぎて明けぬとも逢はむと念夜袖かへず將有 (十
2020)

を、一説のように「念へや袖かへずあらむ」と訓めばこの類になるが、この歌、意味や前後の歌との関係から「夜」を字義どおりに解し「念ふ夜」とする説も捨てがたく、問題がある。

三、古今集における用法

文中用法の「已然形プラスや」は、平安朝になると「已然形プラスばプラスや」に変わる。奈良朝においてもすでに已然形の条件法は接続助詞「ば」を附けるのが普通で、たまたま係助詞の添加されるばあいには、古い已然形だけの条件表現が多く残ったのであるが、「や」と同類の「か」のばあいは、すでに万葉においても、古い「已然形プラスか」一七例に対して「已然形プラスばプラスか」一一例というふうに新形に近づいて来ている。一方「や」のばあいは、すべて旧形だけで、「已然形プラスばプラスや」はまだ一例も見られない。

ところが、古今集になると、もう新形が

ひさかたの月の桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ（巻四）

等八例あらわれる。一方、旧形「已然形プラスや」は文末、文中とりまぜて三一例ある。

31	已然形 プラスや	めや・らめや	10	あれや	2
	なれや	18	ぬれや	1	

右のとおり、万葉に比べると、数が少なくなっている上に、「や」の受ける語の種類のかたよりもきわめて甚しい。右のうち、文末用法であることの明らかな「めや・らめや」は除いて、他の用例を検しよう。

来べきほど時過ぎぬれや待ちわびて鳴くなる声の人をとよむる（巻十）

須磨のあまの塩焼衣をさをあらみ間遠にあれや君が来まさぬ(十五)

水の面に生ふる五月の浮草のうき事あれや根を絶えて来ぬ(十八)

右の「ぬれや・あれや」は条件法として何の疑いもない。ただし、その意は単純な疑問で、反語の意がなく、沢瀉博士の説に従えば、本来反語的な「や」が時代の下るにつれて「か」の領分を侵した結果の用法ということになる。残り一八例はすべて「なれや」で、そのうち次の二例

思ふとも恋ふとも逢はむものなれや結ふ手もたゆくとくる下紐(十一)

春されば野べにまづ咲く見れどあかぬ花まひなしにただ名のるべき花の名なれや(十九)

は明瞭に文末の反語終止、また一四例は下に連体形の結びがあつて条件法と見られる。たとえば、

里はあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋の野らなる(四)

雪ふりて人も通はぬ道なれやあとはかもなく思ひ消ゆらむ(五)

伊勢の海につりするあまのうけなれや心ひとつを定めかねつる(十一)

うき草の上はしげれる淵なれや深き心を知る人のなき(同)

すみ染めの君がたもとは雲なれやたえず涙の雨とのみ降る(十六)

思ひせく心のうちの滝なれや落つとは見れど音の聞えぬ(十七)

等、すべて「……ので……の(だろ)か」で通ずる。下の事実に対して上の理由を疑っており(万葉の「鶉にしもあれや家思はざらむ」の類はない)、多くはやはり軽い反語の気持があるが(「自分は伊勢の海につりするあまのうきなので、心ひとつを定めかねてふらふらしているのか、事実はうきではないのに」のように)、「里はあれて」の歌のように単純な疑問でもある(「里はあれて人は古びてしまった宿なので、ここは庭もまがきも秋の野らと同様な

のか」)。なお、この中に、「なれや」の上に疑問詞のあるのが二例ある。

誰がためにひきてさらせる布なれや世を経て見れど取る人もなき(十七)

荒れにけりあはれ幾世の宿なれや住みけむ人のおとづれもせぬ(十八)

このばあい、疑問詞に対しては「か」の用いられるのが文法だからとて、この「や」を文末用法とする説がある(佐伯博士の、日本古典文学大系古今集の解説)。しかし、文末の「や」としても疑問詞と共に用いられる例はきわめて少いのだし(前に引いた「何せむに吾を召すらめや」万十六ぐらいのもの)、また何よりも、「や」で切ってしまうと、やはり下の連体形止めが浮いてしまう。これも、成章が「凡中のやに上に疑のかざしあるは伏やのみなり」(あゆひ抄・巻一・疑属・何や)と言っているように、文中の「や」の特例と見ることは不可能であろうか。「なれや」がもう特殊な歌語になっているために、このような特例が出来ることもありうるのではなからうか。

以上の一四例は、「なれや」の下が連体形止めになっている点から、私はこれを文中の条件法で通したいが、次の二例は趣を異にする。

秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくるものとすぢ(四)

風吹けば波打つ岸の松なれやねにあらはれて泣きぬべらなり(十三)

前者は下に名詞止めの句、後者は終止形止めの句があつて、共に「や」の係る所がない(前者を「つらぬきかくる」で句切にして「や」の結びとする解は、歌調から言つて無理であろう)。とすれば、この二例は文末用法ということになるが、そのばあい単純に古来の反語終止でかたづけられれば簡単だが、そうではあるまい。これは、本来「なれや」に対する連体形止めであつた下句が、上の条件句から遊離して独立した結果として「なれや」が終止用法となつたものと見るべきであらう。というのは、この「AはBなれや」という譬喩表現は、下に連体形止めを持つ歌にきわ

めて多く、本来Aを非常にかけ離れたBにたとえ、「AはBなので……なのか」と表現し、「や」が「条件句プラス帰結句」の文全体を疑問文化するものであったのに、「なれや」の力が弱まったために、下句は疑問文からはずれ、右のような終止形止めや名詞止めの句になってしまったのである。のみならず、「なれや」自身の疑問の意も薄らぎ、「……なのかなあ↓なんだろうなあ↓なんだなあ」という変化をし、肯定終止の意を持つようになる。その端緒が、すでに古今集において右の二例に見えるのである。

「なれや」と帰結句との結合にゆるみの生じたのは、万葉集でも前述のように已然形だけの接続用法はすでに古形であったが、「已然形プラスや」のばあいには、たまたままだ「已然形プラスばプラスや」が出来ていなかった。ところが古今集ではもうこれがすでに八例あり、その中には「なればや」も一例見える。

梅の花咲きてのちの身なればやすきものとのみ人のいふらむ（十九）

そして当時の接続法としてはこれが普通であり、古形「なれや」はおのずからその接続性を弱め、下句から遊離することになったと思われる。

四、古今集以後の用法

前節では、古今集における「已然形プラスや」が、文中・文末共に万葉集に比べてその用法のかたよりをいっそう甚しくし、なお、文中用法の大部分を占める「なれや」から、従来の反語とは違った新しい肯定終止法があらわれたことを述べた。本節ではその後の変遷を八代集によって調査してみよう。

まず「已然形プラスや（僅少のやは・やも含む）」の全用例数を示す。

すなわち、古今以後しだいに減少して来ており、ただし新古今に至ってやや復活の観があるのは、当時の歌風における復古主義のあらわれであろうか。「めや・らめや」は数が多くてもすべて明瞭に反語終止だから何も問題ないとして、その他ではやはり「なれや」が圧倒的に多い。古今の「なれや」は大部分下に連体形止めがあつて文中用法としうるものであり、そのほかに古来の反語終止と新しい肯定終止のあること、前述のとおりであるが、その後はどうか。表示してみよう。

文中用法	八代集	
	なれや	八代集
	古今	14
	後撰	4
	拾遺	6
	後拾遺	2
	金葉	
	詞花	
	千載	2
	新古今	2
	合計	30

形態	八代集	
	動詞「や」	形容詞「や」
合 計	31	2
らめや	5	2
めや	5	1
ぬれや	1	1
たれや	1	7
なれや	18	7
あれや	2	1
形容詞「や」		2
動詞「や」		
古今		
後撰		
拾遺		
後拾遺		
金葉		
詞花		
千載		
新古今	2	
合計	2	2

合 計	肯定終止	疑問終止	反語終止
18	2		2
7	2	1	
7	1		
6	3	1	
1	1		
4	4		
6	4		
10	6	2	
59	23	4	2

右によつて、肯定終止が後拾遺あたりから多くなり、逆に他の用法が衰退して来ていることが、はっきり見られる。
新しい肯定終止の用例を全部挙げてみよう。

- (1) 秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくるものいとすぢ (古今・四)
- (2) 風吹けば浪打つ岸の松なれやねにあらはれて泣きぬべらなり (同・十三)
- (3) うつつにもあらぬ心はゆめなれや見てもはかなきものを思へば (後撰・十二)
- (4) 屋なれや見ぞまがへつる月かけを今日と言はむ昨日と言はむ (同・十五)
- (5) 別れ路はこひしき人の文なれややらでのみこそ見まくほしけれ (拾遺・六)
- (6) 朝夕に思ふ心は露なれやかからぬ花の上しなければ (後拾遺・四)
- (7) 満つしほのひる間だになき浦なれや通ふ千鳥のあとも見えぬは (同・十一)
- (8) 思ふにも言ふにもあまることなれや衣の玉のあらはるる日は (同・十七)
- (9) 世の中はうき身にそへる影なれや思ひすつれど離れざりけり (金葉・九)
- (10) 影見えぬ君は雨夜の月なれや出でも人に知られざりけり (詞花・七)
- (11) わが恋は吉野の山のおくなれや思ひ入れども逢ふ人もなし (同・同)

⑫胸は富士袖は清見が関なれや煙も立たぬ日ぞなき（同・同）

⑬あだ人はしぐるる夜半の月なれやすむとてえこそ頼むまじけれ（同・九）

⑭荒磯の岩にくだくる波なれやつれなき人にかかる心は（千載・十一）

⑮跡絶えて世をのがるべき道なれや岩さへこけの衣着にけり（同・十七）

⑯世の中はうき身にそへる影なれや思ひすつれど離れざりけり（同・十八）

⑰したひ来る恋の奴の旅にても身のくせなれや夕とどろきは（同・同）

⑱鶺鴒かひ舟高瀬さしこす程なれやむすぼはれゆくかがり火のかげ（新古今・三）

⑲津の国の難波の春はゆめなれやあしの枯葉を風わたるなり（同・六）

⑳明けばまた越ゆべき山の峯なれや空行く月の末の白雲（同・十）

㉑君がせぬわが手枕は草なれや涙の露の夜な夜なぞおく（同・十五）

㉒万代を経るにかひある宿なれやみ雪と見えて花ぞ散りくる（同・十六）

㉓やはらぐる光にあまるかげなれや五十鈴川原の秋の夜の月（同・十九）

右のうち、⑨と⑯は同歌だから実数は二二である。④と⑰を除いて他はすべて「なれや」が第三句末に用いられている。これらの「……なれや」の下の句の形式をまとめると、次のようになる。

(1) 終止形止めの句 6

(2) 「……ぞ・や……連体形」 4

(3) 「……こそ……已然形」 2

(4) 名詞止めの句 4

(5) 「……ば」

2

(6) 「……は」

4

(5)(6)のばあいには、本来条件句であった「……なれや」が、逆に帰結句になってしまっている——たとえば、(3)では「見てもはかなきものを思へば。うつつにもあらぬ心はゆめなれや」、(7)では「通ふ千鳥のあとも見えぬ。満つしほのひる間だになき浦なれや」というふうに。

反語終止は古今の二例だけで、その後は見えない。

疑問終止として挙げた四例は、左のとおりで、後撰以後に若干見える、これまた新しい形式である。

(1) 草枕結ふ手ばかりは何なれや露も涙もおきかへりつつ (後撰・十九)

(2) 程もなく恋ふる心は何なれや知らでだにこそ年はへにしか (拾遺・十二)

(3) 神無月しぐれの頃もいかなれや空に過ぎにし秋の宮人 (新古今・八)

(4) 山かげにすまぬ心はいかなれやをしまれて入る月もある夜に (同・十七)

これらはすべて直上に「なに・いか」という疑問語があり、「何なのか」「どうなのか」という意のようである。(3)を除いては「何(どう)なのか——何(どう)と言うほどのものではない」のように反語的な意があり、古来の反語終止の系統のように見えるが、本当は前述の古今の「誰がためにひきてさらせる布なれや」「あはれ幾世の宿なれや」の変化で、これらの接続性が消失して出来たものではなからうか。

「なれや」五九例よりははるかに少いが、数ではそれに次ぐ「あれや」八例を見よう。

(1) 須磨のあまの塩焼衣をさをあらみまどほにあれや君が来まさぬ (古今・十五)

(2) 水の面に生ふる五月のうき草のうきことあれや根を絶えて来ぬ (同・十八)

③ほととぎす通ふかきねのうの花のうきことあれや君が来まさぬ（拾遺・十六）

④ありあけの月だにあれやほととぎすただ一声のゆくかたも見む（後拾遺・二）

⑤川上のあらふの池のうきぬなはうきことあれやくる人もなし（同・十五）

⑥雨ふれば小田のますらをいとまあれや苗代水を空にまかせて（新古今・一）

⑦もしきの大宮人はいとまあれや桜かざしてけふもくらしつ（同・二）

⑧有明は思ひ出あれや横雲のただよはれつるしのめの空（同・十三）

①②③は明らかに条件法に立って下の連体形の結びと応ずるが、④以下は下が結ばれず、「あれや」で肯定終止している。ここにも「なれや」と同じ変遷が見られる。ただし、④は「あれや」と文末「見む」との呼応と見られれば、万葉の「鶉にしもあれや」の系統となるが（「月さえあつたら……ゆくかたを見ることができようか」の意でこの形式を用いたと見れば）、しかし「だに」と已然形「あれ」との関係に難点がある。あるいは、この「あれや」は命令形とすべきかも知れない。

「動詞プラスや」は、万葉にはかなりあったのに、古今以後中絶し、新古今に至って二例見えるのは、古調復活と見られようか。

今よりは逢はじとすれや白妙のわが衣手のかわく時なき（十五―よみ人知らず）

沖つ風夜寒になれや田子の浦のあまのもしほ火たきまさるらむ（十七―越前）

「形容詞プラスや」が後撰に二例あるのは、万葉にも珍しいので、挙げておこう。

ひぐらしの声聞く山の近けれや鳴きつるなべに夕日さすらむ（五―貫之）

白雲の来宿る峯の小松原枝繁けれや日の光見ぬ（十七―康秀）

結 び

以上、上古から新古今集に至るまでの「已然形プラスヤ」の変遷を見た。この形式は、上古においてすでに已然形の原始的用法の性格を持っていたため、断続にやや不明瞭な点があり、しかもそのままに平安朝以後までも和歌に用いられた。そして、その間に用例はしだいに少くなり用法にかたよりを甚しくして来ながらも、前述のように、反語ないし疑問の終止や条件法から、「なれや」「あれや」の詠嘆の肯定終止という新しい用法を発生させるような変化をした。この変化の過程を拙論では不十分ながら取扱ったのである。

従来のこれに関する論は、一般に通時の変化を無視して、万葉のも平安朝のもひとしなみに見ようとする傾向が強かったのではなからうか。前に参照した佐伯博士の論、さては門前真一氏・宮田和一郎氏の論にはさすがに教えられることが多かったが、しかし万葉の「なれや」に肯定終止の用法を認めるような行き方には賛成できない。拙論では下に連体形止めがあるかないかという形態上の別にとらわれ過ぎた観があるが、しかしこれによって、連体形との呼応がしだいにゆるんで「あれや」「なれや」の肯定終止の成立した過程が、通時的にある程度明らかにされたのではないかと思う。古人の表現意識において断続や意義に多少の不明確さがあるからといって、形態を無視して歌毎に断続思いのままの解釈をするのでは困る——こう思って本文を草したのである。

(注) 門前真一「已然形の下につく係りの『や』」山辺道・「あまなれやおのがものからなく」天理大学学報34学・その他

宮田和一郎「歌語『なれや』考」関西大学国文学27